光源氏須磨の日記

――源氏物語の文学史制覇――

上野英二

一

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私ざまのかゝるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御世なり。

『源氏物語』絵合の巻。しばらくの須磨での逼塞の後、帰京も叶い、今や光源氏は内大臣となって政権に返り咲いた。兄朱雀帝は退位、ついで即位した冷泉帝は、実は源氏が父帝の妃、藤壺に通じて設けた秘密の実子であった。その秘密の皇子も無事帝位に即いた。源氏はさらに、その天皇に、自らの養女、前斎宮を女御として入内させ、着々とその政権の地歩を固めつつあったのである。

そして、「例は聖代より始まる、光源氏は冷泉帝の御代が政治の上でも文化の上でもよき前例を創始されたと後代から仰ぎ見られるような治世たらしめんと努めた」（清水好子「絵合の巻の考察――附、河海抄の意義――」、『源氏物語の文体と方法』所収）。ここに、史上初めて絵合という行事が企てられることになる。「帝の御前で絵合が行なわれるなどとはかつてない「めづらしきすぢ」のことであった」（清水　前掲論文）。「帝の御前」ばかりが「めづらしきすぢ」ではない。絵合という趣向自体、史実に前例を見ない、『源氏物語』ならではの典雅な催しであったのである。

事は、新帝冷泉帝の絵画愛好に始まる。

上は、よろづのことにすぐれて絵を興あるものに思したり。立てゝ好ませ給へばにや、二無く描かせ給ふ。斎宮の女御、いとをかしう描かせ給ひければ、これに御心移りて、渡らせ給ひつゝ、描き通はさせ給ふ。

これに応ずるように、今参りの女御、斎宮の女御も絵を得意とした。勢い、帝の寵はこの女御に移るようであった。気が気でないのは、先輩の弘徽殿の女御、取り分けその父権中納言であった。

権中納言聞き給ひて、あくまでかど〳〵しく今めき給へる御心にて、我人に劣りなむやと思し励みて、優れたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、また無き様なる絵どもを、二無き紙どもに描き集めさせ給ふ。

権中納言は、対抗心を燃やして「物語絵」、「月次の絵」など趣好を凝らして制作させた。これに対して、斎宮の女御の養父、光源氏も伝来の「古代の絵ども」などを、女御のために届けさせた。こうして宮廷の内外は、一時絵によって風靡された観を呈することになった。ここに絵合という前代未聞の行事が企てられた。

絵合は、実は二度行われている。まず、中宮藤壺の御前での絵合。

この人々のとりぐ〳〵に論ずるを聞し召して、左右と方分かたせ給ふ。梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦、右には大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦を、たゞ今は心憎き有職どもにて、心々に争ふ口つきどもを、をかしと聞し召して、まづ物語の出で来始めの親なる竹取の翁にうつほの俊蔭を合はせて争ふ。

当時行われていた歌合の作法に従って、それぞれの陣営は左右に分かたれた。「梅壺」の女御すなわち、斎宮の女御方は左方、弘徽殿の女御方は右方。第一番の番いは、左方『竹取物語』の絵巻に、右方『うつほ物語』俊蔭の絵巻。いずれも、能筆名人による絵と書、料紙にも表紙にも軸にも豪華な装飾を凝らしたものであったが、第一番の勝負は、「今めかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ」という右方優勢のうちに終わった。

続く第二番の番いは、左方『伊勢物語』に、右方『正三位物語』。「これも、右は面白く賑わしく、内裏わたりよりうち始め、近き世のあり様を描きたるは、をかしう見所勝る」という右方優勢であったが、臨席の藤壺の、「在五中将の名をば、え朽さじ」との鶴の一声で、辛うじて左方の勝となった。

双方一勝一敗。再度絵合が企画された。「同じくは、御前にてこの勝ち負け定めむ」。源氏の発案で、このたびは帝の御前での勝負となった。舞台は「女房の侍」清涼殿台盤所、ここに帝は出御、藤壺も陪席した。双方、衣裳、道具に善美を尽して、この盛儀に臨んだ。「四季の絵」その他が出陳され、「多くの争ひども、今日はかたぐ〳〵に興あることも多かり」。雌雄決し難かったこの日の勝敗を決したのは、最終回に満を持して披露された、光源氏自筆の須磨の日記の絵巻であった。

左はなほ数一つある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての

巻は心殊に優れたるを選り置き給へるに、かゝるいみじきものゝ上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描き給へるは、譬ふべきかたなし。

光源氏が、自ら須磨での辛苦の日々を描いたこの「須磨の巻」が感動を喚ばぬはずもなく、この日記の登場の前にすべては形無し。

誰も異事思ほさず、様々の御絵の興、これに皆移り果てゝ、あはれに面白し。よろづ皆押し譲りて、左勝つになりぬ。

勝利は一気に、左方斎宮の女御方、光源氏の側の手に落ちる。光源氏須磨の日記は、絵合の勝利を決定的に光源氏の側に導いた、まさに切り札であったのである。

こうして、藤壺の御前と、帝の御前、二度にわたって行われた絵合は、その盛儀の幕を降す。それは確かに「この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例」。まさしく絵合という空前の催しは、冷泉帝「いみじき盛りの御世」を寿いで、優雅な典例となったのである。

だが、その優雅さとは裏腹に、絵合という行事の背後には、実はきわめて生臭い政治的な問題が潜んでいた。「絵合巻は、冒頭から前斎宮の入内という政治的匂いが立ちこめる」（森一郎「源氏物語の方法――絵合巻をめぐって――」、『源氏物語の方法』所収）。光源氏は「摂関政治体制における権力獲得の常道たる帝の外戚となるために、六条御息所の娘を養女として、冷泉帝の後宮に入れようとするのである」。一方、冷泉帝の後宮には、光源氏のかつての畏友頭中将、今官位進んで権中納言が娘を弘徽殿の女御としてすでに入内させていた。絵合とは、この弘徽殿の女御と、斎宮の女御の間で戦われた。ここに絵合は、にわかに政治的な色合いを帯びることになる。

「この巻に語られる源氏と権中納言の政治的対立はまさしく摂関政治体制における政争そのものであって、源氏や藤壺中宮の動き、権中納言の不安等には当時の政争の匂いを十分に感じる。絵合という優雅な催しの中に争いの心はこめられたのである」（森　前掲論文）。すなわち、絵合に勝利することによって、光源氏の政界における地歩はますます固くなるのであって、絵合という行事は、そうした政治的な勢力争いを如実に反映したものであったのである。[1]

よろづにめづらかなる御宝物ども、人の朝廷までありがたげなるなかに、この本どもなむ、ゆかしと心動き給ふ若人、世に多かりける。御絵どもとゝのへさせ給ふなかに、かの須磨の日記は末にも伝へ知らせむと思せど、今少し世をも思し知りなむにと思し返して、まだ取り出で給はず。（梅枝）

絵合に出陳された、光源氏の須磨の日記の絵巻は、後に源氏の娘、明石の姫君の東宮入内に際して、その婚礼調度として加えられようとした。結局、それは果たされなかったけれども、他ならぬこの絵巻が、「御宝物」とされていたことには、この際注意を払うべきであろう。

善美を尽した絵巻は、一面で「宝物」でもあったのである。当時の権門貴族は、持てる財力を注いで、絵巻の善美を競った。「物語絵のばあいも、うつくしい料紙をととのえ、詞書・絵画ともに能筆をえらんでつくらせるとすれば、上流貴族にとってもすくない負担ではなかった」（むしゃこうじ・みのる「物語と物語絵再論」、『日本文学』第九巻第七号）。にも拘らず、貴族達が競って豪華な絵巻を作らせたのは、それが家の資力、権力、文化水準を代表するものであったからであろう。絵巻とは、単なる芸術作品なのではない。それは、まさに「宝物」として、家の力を世に誇るものでもあったのである。[2]『源氏物語』の絵合が、そうした絵巻を競う行事であったとす

れば、それに勝利することは、その家の持てる総合的な力の勝利に他ならなかった。とすれば、絵合という行事、そしてそれに勝利するということが、いかに政治的な意味を持つものであったか、すでに明らかであろう。

『源氏物語』、絵合という行事に窺える政治的意味は、それに留まらない。

絵合において、源氏の須磨の日記の勝利が光源氏の威勢の伸長をもたらしたのに対して、明暗際立つのは、同じく絵合に出品することが企図されながら、源氏の須磨の日記に圧倒されてか、結局出品を見合されてしまったらしい、朱雀院御記の絵巻である。

後宮の、にわかの絵の流行を聞いた朱雀院は、かつて思いを寄せた斎宮の女御のために肩入れしようと、醍醐天皇御記の絵巻に自らの治世の記事を増補した絵巻を調進、女御に贈った。

院にも、かゝること聞かせ給ひて、梅壺に御絵ども奉らせ給へり。年の内の節会どもの面白く興あるを、昔の上手どものとりぐ〳〵に描けるに、延喜の御手づから事の心書かせ給へるに、また我が御世のことも描かせ給へる巻に、かの斎宮の下り給ひし日の大極殿の儀式、御心に泌みて思しければ、描くやう詳しく仰せられて、公茂が仕れるが、いといみじきを奉らせ給へり。艶に透きたる沈の筥に、同じき心葉の様など、いと今めかし。

「年の内の節会どもの面白く興ある」とは、後の『年中行事絵巻』の如きを考えるべきであろう。また、「延喜の御手づから事の心書かせ給へる」の背後には、『醍醐天皇御記』等の日記の存在を念頭に置くべきであろう。ただし、それが絵巻に仕立てられていたかどうかは、確実でない。しかし、村上天皇の日記[3]が後代、絵本に仕立てられていたことは、絵合の巻の、醍醐、朱雀両帝御記の絵巻を考える上で、大いに参考となる。

村上の御時の日記を、大きなる冊子四つに絵描かせ給ひて、詞は佐理の兵部卿の娘の君と、延喜君とに書かせ給ひて、麗しき筥一双に入れさせ給ひて、さべき御手本など具して奉り給ひければ、

（『栄花物語』つぼみ花）

三条天皇の中宮妍子は、土御門殿において禎子内親王を出産、時の大納言藤原斎信は祝いの進物に、村上天皇の日記を絵本に仕立てて贈ったのである。これは、書物が宝物であったことを示す好例であろう。「艶に透きたる沈の筥に、同じ心葉」、『源氏物語』の朱雀院も、その絵巻を、一種の宝物として斎宮の女御に贈ったのだった。

それは、朱雀院としては、殊の外の思し召しであった、と『源氏物語』は言う。「院の御絵は、后の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし」。朱雀院所有の絵巻類の多くは、母、桐壺帝の弘徽殿の女御経由で、その妹四の君の娘、冷泉帝の弘徽殿の女御に伝えられていたのである。その中で、醍醐天皇の事蹟に朱雀院の事蹟を書き加えたこの絵巻だけは、朱雀院から、言わばその敵方に当る斎宮の女御に贈られたのである。

それは、何故か。それは、ひとえに、かつて斎宮の女御に心を寄せたことのあった、朱雀院の真情によるものであったと思われる。朱雀院が斎宮の女御に贈った絵巻には、他ならぬ斎宮の女御自身が描かれてもいたのである。

かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに、

身こそかく標の外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず

とのみあり。

朱雀院は、斎宮の女御に贈った絵巻に、わざわざ我が身と女御のことを描かせた。そしてさらに、そこに自作

の歌を書き加えた。「そのかみの心のうちを忘れしもせず」。それは、朱雀院の恋情を詠んだものに他ならなかった。「そのかみ」とは、朱雀院の治世、賢木の巻に溯る。

後の斎宮の女御は、朱雀帝の御代の斎宮として伊勢へ下向した。その挨拶に参内した斎宮を、時の帝朱雀帝は見染めたのであった。

斎宮は十四にぞなり給ひける。いとうつくしうおはする様を、麗しう仕立て奉り給へるぞ、いとゆゝしきまで見給ふを、帝、御心動きて、別れの櫛奉り給ふほど、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。（賢木）

送別の儀式は大極殿で行われた。朱雀院御記の絵巻に描かれた「かの大極殿の御輿寄せたる所」とは、まさにその思い出の場面を絵にしたものなのであった。朱雀院にとって、その印象は鮮烈であったようで、「かの斎宮の下り給ひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど、語らせ給ふに」（賢木）、「院にも、かの下り給ひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゝしきまで見え給ひし御容貌を、忘れ難う思し置きければ」（澪標）などと、繰り返し思い起されている。朱雀院御記のこの絵巻は、従って、その朱雀院の、今も忘れ難い斎宮の女御への恋情を託したものであったのである。

しかし、現実は非情であった。朱雀院がそれほどの執心を見せ、「参り給ひて、斎院など、御はらからの宮々おはしますたぐひにて、侍ひ給へ」（澪標）と、求婚の意志を表明したにも拘らず、結局彼女は、源氏の意志によって、今上帝すなわち冷泉帝のもとに入内することになってしまう。

大臣（光源氏）聞き給ひて、院より御けしきあらむを、引き違へ横取り給はむを、かたじけなきことと思すに、人の御あり様の、いとらうたげに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞え給ひける。（澪標）

事は、母六条御息所との交情のゆえに後事を託された光源氏と、源氏との秘密の我が子、冷泉帝の将来を慮った藤壺との連繋によって運ばれたのであった。

従って、朱雀院がわざわざその思い出を絵巻に仕立てて斎宮の女御に贈ったとしても、それは、すでに詮無きことでしかなかったのである。画中の自らの詠歌に対する、女御の返歌に接した朱雀院は、ただ敗北感を嚙みしめる他はなかった。

院の帝、御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思しける。大臣をも、辛しと思ひ聞えさせ給ひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。

朱雀院入魂の絵巻も、その運命の悲惨をかえって惨めに曝すものでしかなかった。光源氏須磨の日記の栄光とは、何たる落差であろうか。朱雀院御記の絵巻は、両者の明暗を際立たせるために物語に登場したとさえ考えられる。

せっかくの朱雀院の厚意によるものながら、絵合の場に、この絵巻が披露された形跡は無い。朱雀院御記の絵巻は、絵合においては、結果として無視されたのである。それを『源氏物語』は、ただ「過ぎにし方の御報いにやありけむ」と述べるばかりである。「過ぎにし方の御報い」、それは源氏の苦境を救い得ず、見す見す須磨へと追いやることになってしまった、時の帝朱雀院が、負うべき報いということである。(4) ここに、朱雀院、光源氏二人の政治的な勝敗は明白となった。それを象徴的に示したのが、片や絵合において最終的な勝利を勝ち得た源氏の日記、片やその深い思いにも拘らず、日の目を見ることもなく葬り去られた朱雀院の日記、それぞれ二つの絵巻であったのである。

書物としての絵巻、そしてそれに書かれるところの、いわゆる文学の意味とは、決してそれ自体の、美的なあるいは文学的なそれに留まるものではなかったのである。それは、しばしば、すぐれて政治的な意味をも併せ持ったのであった。そもそも絵合という行事自体が、すぐれて政治的な意図のもとに企てられていたのである。

恐らく、こうしたことは、『源氏物語』当時の歴史的な現実を、まさしく反映するものであったであろう。「皇后、中宮椒庭に並び立ち、女御、更衣また寵を争い、いずれも才芸ある女房を集めて、その羽翼とすれば、古往今来、女子の文筆に通ずるものの輩出したる、この時より甚しきはなし」（藤岡作太郎『国文学全史　平安朝篇』）と言われる時代、まさに清少納言『枕草子』を擁する藤原道隆、中宮定子の陣営に対するに、藤原道長、彰子皇后の陣営は、『源氏物語』の紫式部を配して対抗しようとした。その拮抗は、まさしく、梅壺、弘徽殿相競った絵合という行事、あるいは、朱雀院御記の絵巻と光源氏自筆日記との対照に照応するであろう。書物は、文学は、すでにして政治的存在でもあったのである。

そうした眼で、改めて『源氏物語』の絵合を見直すならば、光源氏須磨の日記の勝利の意味も、にわかに現実的な印象を深くするのではないか。『源氏物語』作中に描かれた事柄は、『源氏物語』をめぐる時代の状況をさながら反映するものでもあったのである。

だが、絵合という行事の意味はそれに留まらない。注意深く読むならば、絵合という行事にはさらに重大な意味が潜むことに気が付く。それは、藤壺御前の絵合での『伊勢物語』勝利の意味である。

藤壺御前の絵合、その第一番は右方優勢に終わった。続く第二番も形勢は、『伊勢物語』を以って臨んだ左方に対して、『正三位物語』で迎え撃った右方有利に展開した。しかし、その形勢は、藤壺の判定の一言によって

逆転してしまう。

「兵衛の大君の心高さは、げに捨て難けれど、在五中将の名をば、え朽さじ」と宣はせて、宮、

みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海人の名をや沈めむ

なぜここで藤壺は、中立の立場を捨てて、左方『伊勢物語』に肩入れした判定を下したのか。それは無論、「物語の構想の上からは当然要求せらるべきことであった。すなわち、彼女は左方の不振を救うために伊勢を推したのであって、斎宮の女御を応援することは光源氏を援けること、したがって権中納言との勢力争いを光源氏の勝利に導くことになるからである」（清水　前掲論文）。だが、清水説は、それに終わらない。清水氏は、藤壺が勝利を宣した『伊勢物語』の内容に考察を及ぼす。

「が、それにしても当時巷間もっとも流布しており、業平と言えばただちに念頭に浮ぶのは五条二条の后との恋であり、伊勢の斎宮との密通事件であったろう」。「五条二条の后といい、斎宮といい、いずれも品高き女性への禁制の恋で、まさに藤壺と光源氏の秘密に匹敵する」[5]。

こうした内容の『伊勢物語』を、なぜ藤壺がよしとしたのか。「それはおのが秘密に相似する業平の物語を認めることによって、ひそかに自分と光源氏の恋を認めようとする藤壺」の意志の発現であった、ということに尽きるであろう。しかし、さらに清水氏は、そこに「物語作者の意図」を見出している。

藤壺に伊勢物語を認めさせた、藤壺と伊勢物語を結びつけたことに、二人の恋を容認しようとする物語作者の意図を見るのである。

藤壺に『伊勢物語』の勝利を宣言させたのは、『源氏物語』自身が、その描くところの、藤壺と光源氏の秘密

の恋を肯定しようとしたのである、と言うのであろう。藤壺がその御前での絵合において『伊勢物語』に軍配を上げたことの意味は、同じように「品高き女性への禁制の恋」を描く、『源氏物語』の容認、評価を、他ならぬ『源氏物語』自身が作中において行ったということになるであろう。それは、『源氏物語』による、『源氏物語』の自己主張でもあった。

絵合という行事の意味は、『源氏物語』作中における政治的意味に留まらない。それは、物語作中世界の埒を越えて、『源氏物語』の描くところ、その内容自体の意義を世に訴えようとする、すぐれて戦略的なものでもあったのである。

絵合という行事を描くことによって企図された、『源氏物語』の自己主張は、しかし、その描くところの内容にのみ終始するものではなかった。絵合という行事が構想され、それが物語に描かれたことの意味は、その文学史的意義の面からも、正しく測定される必要がある。

実は、『源氏物語』の絵合、特に藤壺御前の絵合は、絵合とは言いながら、その内実は物語絵巻の勝負、すなわち内容からすれば物語合と言うべきものであった。とすれば、『源氏物語』において初めて絵合が聖代の例として企てられたということは、物語合というものが史上初めて行われようとしたことでもあったのである。

清水氏は言う。

帝の御前の絵合が、歌合がはじめて宮廷に認められた記念すべき行事を模するところに、物語が晴れの場にとりあげられるという紫式部の夢、物語作者としての大きな抱負がうかがえるのではないか

たしかに絵合、すなわち物語合とは、前代未聞の行事であった。ましてそれが、帝の御前で行われるなど、奇

想天外の構想であった。

しかし、それ以前にこれに類する行事が無かったわけではない。すなわち、歌合。村上天皇天徳四（九六〇）年、その内裏歌合は天皇の御前で行われている。『河海抄』によれば、『源氏物語』の絵合は、この天徳内裏歌合の例に則って書かれている。この歌合は、「前年殿上の詩合に対抗して、「男已闘文章女宜合和歌」（天徳歌合御記による）と、女房たちを主役に、歌合がはじめて宮廷で行われた」（清水　前掲論文）記念すべき歌合であったのである。『古今和歌集』の勅撰によって、漸く国家公認の文学、漢詩文と肩を並べることになった和歌ではあったが、なお歌合はその盛行にも拘らず、私的なものに留まり、公認の地位を得るには至らなかった。正統の文学、漢詩文に比すならば、和歌の地位は依然低いものに留まった。その歌合を内裏で行い、しかも帝の臨御を仰いで行った、この天徳内裏歌合は、和歌という文学を、歌合という行事を、漢詩文に比肩し得るまでに引き上げた、画期的な出来事であったのである。

『源氏物語』の絵合が、この天徳内裏歌合に拠って書かれているということは、まさしく絵巻の形を採った「物語が晴れの場にとりあげられるという紫式部の夢、物語作者としての大きな抱負」を体現したものであった、ということになるであろう。ここに物語も、和歌に並ぶべき位地にまで引き上げられようとしたのである。

『源氏物語』の時代、物語は未だ公に認められない、採るに足らない文学に過ぎなかった。その現実に対して、『源氏物語』は自己主張を試みたのではないか。物語には物語の真実がある。その独自の意義は、世に認められて然るべきである。「日本紀などは、たゞかたそばぞかし。これらにこそ道々しくくはしき事はあらめ」という、蛍の巻の物語論の一節が聞こえてきそうである。その自恃、「物語作者としての大きな抱負」が、世に先駆けて、

天徳内裏歌合に則って物語作中に絵合、すなわち物語合を描かせることになったのではないか。

『源氏物語』に、こうした自恃と自覚があったとすれば、清水氏の見解は大きく首肯されなくてはならないであろう。

だが、清水氏自身は、その見解について必ずしも積極的ではなかった。先の引用に続けて、氏は次のような留保を加えている。

と、以前は考えていたが、（『源氏物語事典』梗概）それは行き過ぎのようであった。

というのは、冷泉帝御前の絵合ははたして物語絵合だったのだろうか、はなはだ疑わしい。物語本文には物語絵が出たとは一言も書いていない。否定はしていないが、触れてないのである。

たしかに、帝の御前の絵合に出されたのは、「例の四季の絵」、光源氏の「須磨の巻」その他であって、「物語絵が出たとは一言も書いていない」。精確に言えば、『源氏物語』絵合には、帝の御前の物語合は書かれていないのである。清水氏は、帝の御前の絵合に物語が出されていなかったであろうことを以って、その見解に慎重であられた。「それを、いかにも物語絵が出ていたように思いがちなのは、この前の中宮御前の絵合があきらかに物語絵合で、その進行、論争の様子がこまごまと書かれているからである」（清水　前掲論文）。

しかし、それで十分なのではないか。中宮の御前において、物語合が行われたというだけで、「物語が晴れの場にとりあげられるという紫式部の夢、物語作者としての大きな抱負」は、すでに実現されていると見るべきではないだろうか。たとえそれが帝の御前ではなくとも、前代未聞の物語合が計画され、それが中宮の御前で行われ、「この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例」の一つとされたならば、それは十分に文学史上「記念すべき

行事」として実現していると捉えるべきであろう。

実際、現実の歴史の上では、『源氏物語』の後、物語合が実現されることになる。天喜三（一〇五五）年五月庚申六条斎院禖子内親王家歌合。[6]『栄花物語』には、

物語合とて、今新しく作りて、左右方分きて、二十人合はせ給ひて、いとをかしかりけり。（煙の後）

とある。『源氏物語』絵合の構想に籠められた、「物語が晴れの場にとりあげられるという紫式部の夢、物語作者としての大きな抱負」は、見事に実現を見た、と言うべきであろう。

二

「親王より始め奉りて、涙留め給はず」。光源氏の日記は、帝の御前での絵合に披露されるや、涙落さぬ者の無い程の感動を喚んだと言う。

しかし、そもそも光源氏の須磨の日記は、なぜそれ程の感動を人々にもたらしたのであろうか。

絵合の巻の叙述には、「その世に、心苦し悲しと思ほしゝほどよりも、おはしけむあり様、御心に思しゝ事ども、たゞ今のやうに見え」とあった。絵や歌文の出来も勿論ながら、その内容、すなわち須磨における光源氏苦難の日々それ自体が、人々の感動を喚んだのである。絵巻としての結構、絵画としての巧拙ばかりが問題とされたのではない。源氏が政治的圧迫に抗しきれず、須磨に身を引かざるを得なかったこと、須磨という辺境の地でその苦難を耐えぬいたこと、須磨の日記が喚起した、光源氏の人生そのものが、人々を圧倒したのである。

ならば源氏は、この日の来ることを心に期して日記を描いていたのであろうか。無論、それは否である。

いとかく思ひ沈む様を、心細しと思ふらむと思せば、昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らはし、つれ〴〵なるまゝに、色々の紙を継ぎつゝ、手習ひをし給ひ、めづらしき様なる唐の綾などに、様々の絵どもを描きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく、見所あり。人々の語り聞えし海山のあり様を、遥かに思しやりしを御目近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二無く描き集め給へり。

恐らく、こうしたことが須磨の日記を生み出すことになったと思われるが、それは退隠の無念、無聊を慰めるためのものであったのである。源氏が須磨へ退居せざるを得なかった事情を思えば、その無念想像に難くない。源氏は、その思いを如何ともし難かったのではないか。それを晴らすべく、彼は「つれ〴〵なるまゝに」、硯に向った。

古来、左遷の人にその述懐を筆に託すという文事のあったことは、その例少しとしない。例えば、「須磨・明石に語られる源氏の准拠として、罪に当つて都を離れていつた人々――小野篁・在原行平・菅原道真・源高明・藤原伊周と周公旦とがあげられてゐる」（阿部秋生『源氏物語研究序説』）が、これらの人々にも左遷の文業が伝えられている。

例えば、小野篁[7]、在原行平。

隠岐の国に流されて侍りける時に、詠める　篁朝臣

思ひきや鄙のわかれに衰へて海人の縄たき漁りせむとは

田村の御時に、事に当りて、津の国須磨と言ふ所に籠り侍りけるに、宮の内に侍りける人に遣はしける

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつゝ侘ぶと答へよ　　在原行平朝臣

『古今和歌集』巻十八は、小野篁の詠歌に続いて在原行平の述懐を併せ載せている。篁の歌は、須磨の光源氏にも「漁りせむとは思はざりしはや」と引かれているし、行平は、光源氏須磨退居の直接的な先蹤であった。

おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩垂れつゝ侘びける家居近きわたりなりけり。

源氏の寓居は、かつて行平が不遇を託したその侘住いを襲うものとして描かれていた。

光源氏の須磨の日記は、「まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる」とあった。『源氏物語』須磨の巻には、

雲近く飛びかふ鶴も空に見よ我は春日の曇りなき身ぞ

八百萬神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

など、源氏が退隠の憤懣の歌を詠んだことが語られているが、「あはれなる歌なども交れる」という須磨の日記にも、こうした歌が収められていたに違いない。

光源氏の須磨の日記は、こうした左遷の人の、遣る瀬ない思いを託した文事に連なるものとして描かれたものでもあったのである。

なかでも、その状況から言っても、それが一つの書物であった点からしても、注目すべきは、菅原道真、大宰府左遷後の日々を綴った『菅家後集』であろう。(8) 政敵左大臣藤原時平の讒に遭って大宰権帥に左遷された道真は、その断腸の思いを得意の漢詩に託した。その詩の一句は、須磨退隠の源氏にも口ずさまれ、須磨での侘住いの情

景を印象深いものにしてもいる。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でゝ、殿上の御遊び恋しく、所々眺め給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里の外の故人の心」と誦じ給へる、例の、涙も留められず。

その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御様の、院に似奉り給へりしも、恋しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今こゝにあり」と誦じつゝ入り給ひぬ。

「御賜の御衣は今こゝにあり」とは、『菅家後集』「九月十日」の一句。一年前、清涼殿上での宴席での応制を賞で、時の帝醍醐帝は道真に御衣を賜った。しかし世情一転、時の変改は停めようもなく、今年の同じ日、彼は流謫の地で憤懣を嚙みしめつつ、一年前の栄光を振り返ることとなった。それと同じような思いを、須磨の光源氏も味わうことになったのである。(9)

これら大宰府での謫居の詩について、『大鏡』は、「このことゞもたゞ散りぐなるにもあらず、かの筑紫にて作集させ給へりけるを書きて、一巻とせしめ給ひて、後集となづけられたり」と言う。『菅家後集』は、道真の、配所での無念の思いを纏めたものに他ならなかった。

恐らく、須磨退隠の源氏が、日記にその述懐を託したという着想は、こうした史実を承けたものであったであろう。

こうして左遷流謫の文人達は、その想いを文筆に注いだのである。道真の『菅家後集』に寄せた思いは、その識語に明らかである。

西府新詩一巻、今号二後集一。臨レ薨、封緘送二中納言紀長谷雄一。

道真は、謫居の詩集を、親友紀長谷雄に届けるよう遺言した。左遷から謫居、そしてやがて死に臨まざるを得なかった無念の思いを分ち合ってくれることを、道真はひそかに長谷雄に期待したのであろう。たとい世に容れられなくとも、一人でも共感してくれる人がいるかも知れない、その一点で、人は文筆に向う。

須磨における光源氏も、その一人であった。

御はらからの親王達、睦ましう聞え給ひし上達部など、始めつ方は、訪ひ聞え給ふなどありき。あはれなる文を作り交し、それにつけても世の中にのみ賞でられ給へば、后の宮聞し召して、いみじう宣ひけり。「おほやけの勘事なる人は、心に任せてこの世の味はひをだに知ること難うこそあなれ。面白き家居して、世の中を譏り擬きて、かの鹿を馬と言ひけむ人の僻めるやうに追従する」など、悪しき事ども聞えければ、煩しとて、絶えて消息聞え給ふ人無し。

源氏の万能は文筆にも及んだ。あたかもそれは、道真の学才を連想させるであろう。源氏もまた、詩文の交流によって真情を理解されることを期待したのである。明らかに須磨の光源氏は、流謫の文人の面影を漂わせている。

勢い、不遇の文筆は、「世の中を譏り擬」くことにもなる。それが災いして、その文筆の交流も途絶えることになったと言う。

そうした中にあって、なお須磨の日記だけは書き継がれた。

絵を様々描き集めて、思ふことゞもを書き付け、返り事聞くべき様にしなし給へり。見む人の心に沁みぬべ

きものの様なり。いかで空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえ給ふ折々、同じやうに絵を描き集め給ひつゝ、やがて我が御心あり様、日記のやうに書き給へり。いかなるべき御様どもにかあらむ。（明石）

少くとも「二条の君」紫の上その人は、光源氏の日記のよき理解者であった。遠く天地を隔てた紫の上の理解を期待して、源氏は孜々と日記を描いた。[10] 果して、源氏の思いは通じ、不思議なことに都にいる紫の上もまったく同様の日記によって、源氏の思いに同調していた、と物語は伝えている。

『河海抄』は、絵合の巻「かの旅の御日記の箱をも取り出でさせ給ひて」に注して、

須磨明石の日記也。菅家宰府間事を令二記置一給云々。又後集も彼時御作也、此例歟。

と述べる。まさしく、道真『菅家後集』などは光源氏須磨の日記の先例として擬すべき流謫の文業であったのである。[11]

しかし、先例はそれに留まらない。「罪に当ることは、唐土にも我が朝廷にも、かく世にすぐれ、何事にも人に異になりぬる人の、必ずある事なり」（須磨）。その淵源を尋ねて歴史を溯れば、不遇の文人の文業の伝統は、その本家たる中国にまで至り着く。分けてもその典型は、『菅家後集』に「詠二白楽天北窓三友詩一」とあることが端的に示すように、白楽天その人であった。

白氏洛中集十巻
中有北窓三友詩
一友弾琴一友酒

道真は日頃敬愛して止まない白楽天の詩集を配所に携え、期せずして境遇を同じくすることになった先賢の詩に思いを寄せ、自らを慰めた。

源氏もまた同様である。

かの山里の御住処の具は、えさらずとり使ひ給ふべきものども、ことさら装ひもなくことそぎて、またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。

「文集」は『白氏文集』、「琴」も「北窓三友詩」等に歌われた「琴」である。源氏もその退隠の寓居で、白楽天の不遇を偲んだのである。

道真も光源氏も、ともに同じ境遇の人として白楽天の事蹟を振り仰いだ。なぜなら、白楽天こそ、その閲歴に左遷流謫の跡を留める、大唐の大詩人だったからである。

元和十（八一五）年、楽天四十四歳、時に太子左賛善大夫であった白楽天を突然左遷の災いが襲い、彼は江州司馬に遷され都を追われる憂き目を見る。事は、宰相武元衡の暗殺事件に端を発した。その間のことどもを、彼の西洋へのよき紹介者であり、『源氏物語』の名訳によっても知られる、アーサー・ウェーリーの評伝によって、しばらく辿ることとする。

その朝、彼はいつもの仮睡を止めて、あらゆる可能な手だてを尽して、暗殺者を見出し、逮捕すべきである、と要求する請願書を書いた。

しかし、この楽天の行動は反発を呼び、彼を快く思わない人々の攻撃を招くことになってしまった。楽天自身は、次のように記している。

私に共鳴しない人々は、すぐさま私に対し、あやまった告発をしたり、中傷的な話をでっち上げることによって、私の行為の動機を信用できないものにしようとした。さらに高位の者、権力のある者は、この緊急事態の重大さを量ろうとせず、私の言ったことが、言う必要のないことであると示そうとして、残りの宰相・各省の次官〔丞郎〕・給事・諫官・御史、あるいはそれらの長官が、意見を言ったり請願をしていない時に、何故、一介の東宮の賛善大夫が、国家にふりかかった不幸についての憂慮を表わすことが、自分の任務だと考えたのであろうと、ことごとく詰問するのだった。

私への敵意がどのようにして生まれたかを、私はよく知っている。私は卑しい身分から、特別の恩寵により、番狂わせに玉座に近い地位へと昇進させられた。（中略）私はまた――現にごらんの通り――何が公然と言われるべきか、何が公然と言ってはならないものか、というようなことについてあまり弁えなかった。直接の陳情書と秘密の奏上を別とすれば、私は、ある事柄が皇帝の耳に達するために、何かの方策が必要な場合には、その話題を歌や詩の形にして表わした。これこそ、皇帝の耳に入れる最も容易な方法であり、皇帝を戒めるための、最も効果的な方法であると考えられた。しかし、そうすることにより、私と意見を異にするものに対し、攻撃の機会を与えることとなった。そうなると、陛下と私との間に問題をひきおこすことは、彼らにとって容易であった。そして、一度そのような誤解が生ずると、君と臣の間のこととて、それを晴らすのは不可能であった。これを別としても、地方の軍事指揮官たちは、私が賄賂を取ろうとしないのを快よく思わず、首府の政治家たちは、私がどの派の指導者にもつこうとせず、独立している方を好むのを示した

時、私に向って刃を向けた。どこかの派に属していたような者は、私が彼らの例にならわないのを怒り、私に反対して言われているすべてのたわ言を、すぐさま信じこもうとし、結局、実際に私の名誉を害うような、何かを握ろうと腐心した。かくして、私は困難に巻き込まれたのだ。

（アーサー・ウェーリー『白楽天』花房英樹訳）

彼自身の語るところによれば、まさに、清廉潔白、直情径行、詩人としての真実を貫いたために、白楽天は左遷の憂き目に見舞われたのである。しかしそれこそ、和漢を通じて範として仰がれるべき、文人の生き方の理想だったのではないか。

それは、同じく「卑しい身分から、特別の恩寵により、番狂わせに玉座に近い地位へと昇進させられ」、「意見を異にするものに対し、攻撃の機会を与えることとなっ」てしまった、道真の踏んだ運命ともほぼ重なる。道真が左遷の後、自らを白楽天に重ねたことは当然のことであった。

『菅家後集』「不レ出レ門」。

一従謫落在二柴荊一
万死兢々跼蹐情
都府楼纔看二瓦色一
観音寺只聴二鐘声一

同題の詩は、『白氏文集』巻二七、三六にも収める。また三句四句の対は、『白氏文集』巻一六「香炉峯下新卜二山居一草堂初成偶題二東壁一」の、

遺愛寺鐘欹レ枕聴
香炉峯雪撥レ簾看

の対に倣うものであろう。大宰府の配所に逼塞して、彼は白楽天の不遇に思いを馳せたのである。

江州左遷の後、程無く白楽天は自らその詩集を編む。また、親友元稹と文通し真情を分ち合い、[12] あるいは左遷の鬱憤、謫居での感懐を詩文に託した。それはそのまま、道真に『菅家後草』およびその詩を作らせる契機となったと思われる。

事は源氏も同様である。光源氏の須磨退居は、白楽天の江州左遷をも襲うものであった。源氏の須磨の侘住いは、白楽天が左遷の任地、江州香炉峯下に営んだ草堂を、そのモデルとしている。[13]

住ひ給へる様、言はむ方なく唐めいたり。所の様、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。

とは、「香炉峯下新卜二山居一草堂初成偶題二東壁一」の、

五架三間新草堂
石階松柱竹編墻

を、そのまま採り用いているし、その侘住いの描写、

一人目を醒まして、枕をそばだてゝ四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ち来るこゝちして、涙落つとも思へぬに、枕浮くばかりになりにけり。

は、同じく前掲「遺愛寺鐘欹レ枕聴」によっている。そしてそもそも、その侘住いに「文集など入りたる箱、さ

ては琴一つ」などを持ち込んだこと自体が、白楽天「草堂記」、「堂中設二木榻四、素屏二、漆琴一張、儒道仏書各三両巻」を襲うものであった。

「横様の罪に当りて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる」（明石）。源氏自身は、須磨への退居を無実の罪と意識していた。「私に共鳴しない人々は、すぐさま私に対し、あやまった告発をしたり、中傷的な話をでっち上げることによって、私の行為の動機を信用できないものにしようとした」という白楽天の思いは、須磨退隠を決意した光源氏も等しく抱いた感慨であったに違いない。

白楽天は、しかし、その草堂を営むことによって、わずかに心の平安を手に入れることになる。俗事から離れることにおいて、左遷はかえって、詩人の精神に自由の天地を与えることになった。

ウェーリー『白楽天』。

その小屋は全く小さかった。木造部は彩られておらず、壁も白く塗られていなかった。家具は、四つの木製の長椅子と二つの飾り気のない屏風であった。彼は、数冊の書物（孔子、道教、仏教などのもの）と、うるしぬりのリュート（琴）をそこに置いた。彼がそれを所有するに至った日、恍惚として、山、滝、竹藪、雲のかかった峯などを見晴しつつ、辰の刻から酉の刻まで（午前七時から午後五時まで）坐っていると、すでに彼の精神が偉大な「外部的満足と内部的平和」に融けこんで行くのが解った。

あらゆる俗事、束縛から解放された、「外部的満足と内部的平和」の境涯こそは、文人の理想境であったのである。光源氏における須磨にもまた、そうした側面があった。

垣の様より始めて、めづらかに見給ふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所

につけたる御住ひ、様変はりて、かゝる折ならずは、をかしうもありなましと、昔の御心のすさび思し出づ。近き所々の御荘の司召して、さるべき事どもなど、良清の朝臣、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時の間に、いと見所ありてしなさせ給ふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まり給ふここち、うつゝならず。

源氏の侘住いは、実は十分に配慮され、そこには風流な環境が用意されていたのであった。それは、「元和十五年の昔、思ひ出だされて」と、白楽天の謫居生活にあこがれ、「あはれ罪無くして、配所の月を見ばや」[14]と願って遁世し、大原での草庵生活を堪能した中納言顕基（『撰集抄』「中納言顕基発心ノ事」）の風雅を、すでに先取りするものでもあった。

左遷流離の文人の文業は、こうして遡るならば、中国、白楽天にまで至り着く。少くとも、光源氏は道真、白楽天の、そしてその道真も白楽天の、不遇の生活に我が身を重ね、その文事を襲おうとしたのである。それは、あたかも一つの文学的伝統というべきものを形成している。

しかし、何故に左遷流離の文人に、そうした文業の伝統が生まれたのか。

白楽天をさらに遡るならば、彼の思慕した文人として、陶淵明の名を見出すことができる。

かねて、陶淵明の高風に私淑していた楽天は、江州左遷の一時、たまたま近くにあった淵明の故宅を訪れ、その人となりを偲んでいる。「予夙慕二陶淵明為一人一」、「我生二君之後一、相去五百年、毎レ読二五柳伝一、目想心拳拳」、「今来訪二故宅一、森若二君在一前」（「訪二陶公旧宅一并序」）。楽天の淵明への尊敬はどこにあったか。それは、「連徴竟不レ起、斯可レ謂二真賢一」、度重なる任官の誘いにも応じず、「慕下君遺二栄利一、老死中此丘園上」、栄利を捨てて、田

園に退隠し、その志を全うしたからに他ならなかった。

淵明の帰田は、必ずしも左遷のためではない。彼の「帰去来」は、自ら進んでの辞職、退隠であった。しかし、左遷によって閑職に逼塞することも、自主的に退隠することも、官途への挫折とそれからの解放という経過をたどる点において、択ぶところはない。「おのれの肉体を政治に参与させて、人人のために清潔な世の中を作り出そうということも、おのれの希望であった」。「しかし結果は、どうであったか。おのれの精神が、肉体の行動の支配を受け、その奴隷となるのを、おのれはどうすることもできなかった」。「事がらの陰鬱さを見きわめると共に、おのれはそれからの解放を求めた」（吉川幸次郎『陶淵明伝』）。違いは、離職が自主か強制かの点にのみある。左遷であったとしても、自由の天地が手に入るならば、それは大いなる「解放」ともなった。人はそこで自由を楽しみ、あるいは自分と真摯に向き合った。そこに、隠逸の文学が生まれた。左遷流離の文業も、必ずしも憤懣悲哀の文字ばかりではない。それはしばしば、内省自適の文学ともなったのである。

陶淵明の伝は、『宋書』、『晋書』、『南史』の逸民伝に載る。『後漢書』「逸民列伝」は、そうした「逸民」の実例を集め、その本質を総括している。

或隠居以求二其志一、或回避以全二其道一、或静レ己以鎮二其躁一、或去レ危以図二其安一、或垢レ俗以動二其概一、或疵レ物以激二其清一

初めの一句は、『論語』季氏の一節。志ある者は、その純粋さのゆえに、権力と、あるいは世俗と対立せざるを得ないであろう。またある時は、その完遂を阻まれるであろう。志ある者は、隠遁して始めてそれを貫くことができる。そうして始めて、身を安んじ、心を静かにして真実の生き方を追求し、その理想を実現することがで

きる。その境地においてこそ、人は何ものからも自由に自身と対話することができる。そこに、隠逸の人の文業が成り立つ。

左遷流離の人の文事の理想も、基本的にはそうしたところに求められた。我が身を「五柳先生」陶淵明に擬えて、自らの伝「酔吟先生伝」をものした白楽天も、左遷の毎日を隠逸の日々として娯しんだのであった。

その生活を謳ったのが、「草堂記」であり、「香炉峯下新卜二山居一草堂初成偶題二東壁一」であった。これらがすなわち、その他の謫居の詩文とともに、光源氏須磨の日記のはるかな淵源であった。「所の様、絵に描きたらむやうなるに」とある以上、源氏の侘住いの様は、その日記に必ず描かれていたはずである。それは、光源氏の「草堂記」でもあった。[15] 須磨退居の光源氏は、世に容れられぬ隠逸の文人の面影を宿し、須磨の日記は、その自らなる所産として書かれたものでもあったのである。そこには、世俗を離れた、光源氏真実の文字が綴られていた。それが人々の心を揺るがさぬはずはない。光源氏の須磨の日記は、『源氏物語』理想の主人公の、理想の文人としての文業だったのである。

しかし、ここになお光源氏須磨の日記の先例とすべき大事な例がもう一つ残されている。それは、須磨流謫ならぬ東下りの流謫を、その重大な内容としている、他ならぬ『伊勢物語』である。

主人公、在原業平は、恐らく二条后との密通のためであろう、「京にあり侘びて、東に行きけるに」（定家本第七段）と、自ら身を引いて東へ下った。その経緯は、表面上は朧月夜尚侍との、より深いところでは藤壺との密通のゆえに、都に居づらくなって須磨へと退居する[16]光源氏の辿った人生の軌跡と重なっている。

渚に寄る波の、かつ返るを見給ひて、「うらやましくも」と、うち誦じ給へる様、さる世の古言なれど、め

づらしう聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。

都から須磨への途上、源氏の口ずさんだ歌句は、『伊勢物語』第七段、業平東下りの詠歌であった。(17)

いとゞしく過ぎ行くかたの恋しきにうらやましくもかへる波かな

その流竄の業平にも文業が伝えられていた。すなわち、『伊勢物語』に収められた和歌。そして『伊勢物語』それ自体である。

『狭衣物語』は、『伊勢物語』を「在五中将の日記」と呼んだ。すなわち、『伊勢物語』は、「在五中将」在原業平の、「日記」であるとも考えられたのである。『大鏡』も、『伊勢物語』の記事を業平の日記と考えていたらしい。

この頃、古今、伊勢物語などおぼえさせ給はぬはあらむずる。「見もせぬ人の恋しきは」など申すことも、この御仲らひのほどとこそは承れ。末の世まで書き置き給ひけむ、恐しきすきものなりかしな。

さすればこそ、絵合の席でも、「業平が名をや朽すべき」、「在五中将の名をば、え朽さじ」と言われたのであろう。「在五中将の日記」、『伊勢物語』は、光源氏須磨の日記の大いなる先例であったと考えるべきではなかろうか。

絵合の席上、『伊勢物語』の方人として平内侍は、

伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだ事のひきつくろひ飾れるに押されて、業平が名をや朽すべき

と、『伊勢物語』を称揚した。『伊勢物語』には、「深き心」が籠められていると言う。勿論、それは、「在五中将」業平の「心」である。数々の恋愛、禁断の恋、そして流離。そうした事どもを記した『伊勢物語』には、そ

の真実、業平の「深き心」が託されていると、理解されていたのである。それは、「世の常のあだ事のひきつくろひ飾れる」というようなものとは、一線を画する作品であると主張された。

それはそのまま、源氏の須磨の日記にも通ずるものではないか。

かゝるいみじきものゝ上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描き給へるは、たとふべきかたなし。親王より始め奉りて、涙留め給はず。その世に、心苦し、悲しと思ほしゝほどよりも、おはしけむあり様、御心に思しゝ事ども、たゞ今のやうに見え、所の様、おぼつかなき浦々、磯の隠れなく描きあらはし給へり。草の手に、仮名の所々に書き交ぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる、類ゆかし。

絵合の席に披露された源氏の日記は、一座の人々の感動を喚んだと言う。それは、源氏の「御心に思しゝ事ども」、すなわち光源氏の「深き心」が描かれていたからに相違ない。その真実が、真摯に「書きあらは」されていたからこそ、その日記は、人々の共感を喚び、絵合においてその決定的な勝利を勝ち得たのである。

三

しかし、白楽天にしても、道真にしても、左遷の文業は、親友等のわずかの例外はあったにしても、その当座は多くの理解者に恵まれたわけでは必ずしもなかった。それに対して、源氏の須磨の日記が、紫の上のみならず、絵合列座の人々の共感を喚び、あまつさえ臨席の藤壺の台覧、そして帝の叡覧に浴したことは、異例の出来事であったと言わなくてはならない。

源氏の流離の文業であった須磨の日記が多くの理解者を得、果ては叡覧を賜るに至ったことは、恐らく『うつほ物語』蔵開等に見える、俊蔭渡唐の日記以下の書物の、帝への披露に想を得ている。

『うつほ物語』蔵開の巻は、仲忠が、京極の地に一族の旧邸を見出すところから始まる。荒れた屋敷には、文庫が残り、仲忠は、「累代の博士の家」の蔵書の数々を発見する。少しずつ持ち出しては、それらの書物に読み耽っていた仲忠は、帝にそれを報告、その一部を披露することとなった。

彼の家の古集のやうなるものに侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父が日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで日付けなどして書きて侍りけること、俊蔭帰りまうで来けるまで作れる事ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。(18)

俊蔭の父の日記、母の歌集、日記、俊蔭の集その他、諸本異同の激しい所であるが、そこには、「俊蔭帰りまうで来けるまで」の「その人の日記」、恐らく俊蔭の渡唐日記が含まれていたようだ。

仲忠は、これらを叡覧に供し、帝の御前で読み上げた（蔵開中）。

まず、「俊蔭の主の集」、「俊蔭の主の父式部大輔の集」の奏覧。

何事し給ふにも声いと面白き人の誦じたれば、いと面白く悲しければ、聞し召す帝も御しほたれ給ふ。（中略）悲しき所をばうち泣かせ給ひ、興ある所をば興じ給ふ。をかしきをばうち笑はせ給ひつゝ、異心無く聞し召し暮らす。

続く、「俊蔭の主の集」その他の披露。

さてまう上り給へば、昨夕の俊蔭の主の集を読ませ給ふ。

今宵は后の宮まう上り給へり。

聞し召したる限りは、上も東宮も泣き給ふ。したるやうは、たゞありつる事を、物語のやうに書き記しつゝ、その折の歌どもを付けたり。面白き所も悲しき所もありけり。

これは、俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りける間より始めて、京に娘の上を言ひ初めて、言ひつゝ折々に歌あり。これが面白く悲しき事は、彼には勝れり。

このたびは、東宮に后の宮も陪席した。帝以下、列座の人々の感銘の様は、そのまま『源氏物語』にも受け継がれている。

親王より始め奉りて、涙留め給はず。

様々の御絵の興、これに皆移り果てゝ、あはれに面白し。

さらに『源氏物語』との関連で注目すべきは、「俊蔭の主の集」に続いて披露された草子が、「たゞありつる事を、物語のやうに書き記しつゝ、その折の歌どもを付けたり」というものであった点である。「たゞありつる事を」「書き記しつゝ」ということは、まさにそれが日記とも言うべきものであったことを示すであろう。しかもそれには、「その折の歌ども」が含まれていた。さらに、それに次いで披露された、恐らくは俊蔭の渡唐日記も、「折々に歌あり」というものであった。それらはまた、「唐の色紙を中より押し折りて、大の草子に作りて、厚さ三寸ばかりにて、一つには例の女の手、二行に一歌書き、一つには草、行同じこと、一つには片仮名、一つは葦手」というものでもあった。

これらは恐らく、「草の手に仮名の所々に書き交ぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども

交れる」という光源氏の須磨の日記に直結するであろう。

あるいは、俊蔭の渡唐流離の間の詩集が、その後屏風に仕立てられたことが、楼上の下に見えることも、この際参看すべきかも知れない。

治部卿集の中にある唐土より彼方、天竺よりは此方、国々の文をその年頃のあり様を、かの大将描かせ給へる屏風、例に似ず清らに麗し。皆ながら唐綾に描きて縁の錦、裏より始めて清らなり。

これはただちに、源氏の須磨での画業を連想させる。

つれ〴〵なるまゝに、色々の紙を継ぎつゝ、手習ひをし給ひ、めづらしき様なる唐の綾などに、様々の絵どもを描きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく、見所あり。

流離の地での感興は、しばしば文業となり、また同時に画業ともなったのであろう。源氏の須磨の日記が、『うつほ物語』の「集ども日記ども」、俊蔭の日記その他に想を得たものであること、疑いを容れない。

俊蔭の日記は、「俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りける間より始めて」とある如く、俊蔭の渡唐の間の事、すなわちその流離の日々を内容としていたであろう点においても、源氏流離の日々を綴った須磨日記の先蹤であったと言い得る。

しかも、それぞれ、その流離があったからこそ、その後の家の繁栄がもたらされたのでもあった。『うつほ物語』の場合、俊蔭の渡唐、そしてその後の漂流、苦難があったからこそ、彼は後々その家を隆盛に導く、秘琴の伝授を受けることができたのであるし、『源氏物語』の場合も、政治的難局を須磨に避け、人生の辛酸を嘗めたからこそ、その後の源氏の栄達があった。それぞれの日記は、ともにその家、功業の記念碑として尊重さるべき

書物であったのである。

そもそも、『うつほ物語』にこれら書物の発見と叡覧の事が書かれたのは、何故であったであろうか。

京極の荒れた屋敷の文庫に多くの書物を見出した仲忠は、年来の疑念が氷解する思いであった、と言う。「昔、累代の博士の家なりけるを、一枚も書見えず」、さては博士家相承の書物はこの文庫に納められてあったのか。仲忠の発見した書物は、曾祖父清原王、祖父俊蔭以来の学者の家に伝えられてあるべきものであった。「仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍り難き所に棄てたるやうにて侍りけるを、さすが人のえ取り失はで侍りけるを、いと見捨て難くて取り出でゝ侍る」、「書どもを見つゝ、夜昼学問をし給ふ」。仲忠は集中してそれらの書物を習い取った。

やがてそれは天聴に達し、帝の叡感にあずかることになる。

学問など心に入れてものせらるゝは、朝廷のためにもいと頼もしき事なり。高麗人も来年は来べきほどなるを、博士のをのこどもとても、昔の如く賢き者乏し。

さる文書、書などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこき事。

帝は、書物の発見を祝い、仲忠の習得を国家的な慶事として歓んだ。ここに仲忠は、帝の一層の信認を勝ち得、大いに面目を施したのであった。すなわち、学問教養は国家有為のものであり、その源泉たるものが書物であると尊ばれたのである。それは、書物と学問文事の意義を高らかに称揚するものであったのである。

そうした学問教養を保証するという意味において、まさに書物には大きな力があったとされたのである。その意味においても、やはり書物は、「宝物」であった。

この書の目録を見給へば、いといみじくありがたき宝物多かり。

これらの書物は、それゆえに、「宝物」として尊重されたのである。しかも、その内容は、俊蔭一族の功業の記録。これらは一族を繁栄に導く力を持つものとして、子孫に伝えられたのであった。

実際、これらの書物は、しかるべき子孫に伝わるよう守護すべしとの、俊蔭の遺言、「この書は俊蔭後侍らず。文書の言葉、はかなき女子知るべきにあらず。二三代の間にも後出でまうで来ば、そがためなり。その間、霊より て護らむ」によって守り伝えられたのであった。

光源氏の須磨の日記も、「かの浦々の巻は、中宮に候はせ給へ」とあって、絵合の行事の後、藤壺に伝えられたことが知られる。冷泉帝外護の思いを、藤壺と分ち合うことを企図してのことであろう。[19] 光源氏須磨の日記は、源氏を絶世の栄花へと導き、さらに子孫にも繁栄をもたらす、まさに「宝物」として藤壺に伝えられた。実際、それぞれの物語において、これらの書物が、俊蔭の一統、光源氏の一族に繁栄をもたらすことになること、すでに述べた通りである。[20] 文事、書物が、現実をも動かし得る力を持つことを、これは力強く主張するであろう。

こうしたことが物語に書かれたことの背後には、あるいは、学者文人の、「ひそかな夢」があったのかも知れない。[21]

政治とは、理想をこの世に実現するものでなければならぬ。その理想とは、学問文事の追究するところである。しかして、学問文事は、この世を現実に動かし得るものであるべきだ。しかるに現実はそうでない。それが実現されるのが、学者文人にとっての「理想国家の夢」であった。

玉上琢彌『源氏物語評釈』は、『源氏物語』には、「学者の家に生まれた」作者紫式部の、「ひそかな夢」が託

されていると言う。

例えば、乙女の巻。「光る源氏の子、夕霧が少年時代漢学を勉強したときの先生」、「大内記は、学者らしい学者で、たまたま光る源氏に見出されて出世していく」。そういう世の中であれば学問の理想が実現されるであろう。

それは学者の家に生まれた紫式部のひそかな夢でもあるだろう。「昔おぼえて大学のさかゆるころ」（乙女の巻）と作者はいっている。作者にとって理想国家の夢であったのだ。（『源氏物語評釈』桐壺）

現実はどうであれ、物語の中でだけは、文事、書物が現実を動かすという学者文人の「ひそかな夢」が実現される。『源氏物語』における、光源氏須磨の日記の意義もこうしたところに由来したのではないか。そして同時に、『うつほ物語』の書物もまた。

『うつほ物語』の作者が、「誰であるかは全然見当がつかない」。しかし、「物語の内容から見ると、相当に学問もあり文才もあり、禁中のことにも通じ、有職の方面にも心得のある人であるから、しかるべき廷臣などでもあらうと思ふのであるが、官位はさう高い人ではなかつたであらう」（宮田和一郎「朝日古典全書『宇津保物語』解説」）とするならば、そこにも同様の「ひそかな夢」のあったであろうこと、想像に難くない。「菅原道真や、清原俊蔭の父（うつほ物語）が兼任している式部大輔も、やかましい職で、学才がないと勤まらない」（玉上　前掲書）。『うつほ物語』が、そういう人物を拉し来たって、登場人物の第一に据えたことの意味は小さくないのではないか。

同時に、この俊蔭の父と菅原道真との官職の類似もまた、単なる偶然として看過することはできない。

それは『うつほ物語』の、これら書物の叡覧について、「『菅家三代集』のことが、素材となってゐる」ことが夙に指摘されている（中村忠行「宇津保物語の背景――若干の史実と素材について――」、宇津保物語研究会編『宇津保物語新論』所収）からである。「天覧に供せられたといふことから、類似の例を求めると、かの道真の手によって奉られた『菅家三代集』のことがあるばかりである」。

昌泰三年、道真は、時の帝醍醐天皇に、累代の集、祖父清公の『菅家集』、父是善の『菅相公集』、自身の『菅家文草』を献じ、その叡覧に供えた（『日本紀略』、『菅家文草』、『菅家後集』）。天皇は、「更有三菅家勝二白様一」と道真の詩文を賞し、愛唱すること、白楽天のそれに勝ったと言う。「平生所レ愛、白氏文集七十巻是也。今以二菅家一不二亦開レ帙」（『菅家後草』「見三右丞相献二家集一」御製および注）。道真は、そうした天皇に対して、「天子之好レ文」（「献二家集一状」、『菅家後草』貞享四年板）と賞讃を惜しみなくしている。

『うつほ物語』蔵開の日記叡覧も、『源氏物語』絵合の日記叡覧も、恐らくこの、『菅家三代集』天覧の史実に基づいて書かれたものであろう。それは、「学者の家に生まれた」者の理想を描くものであった。

しかし、物語と現実との間には、決定的な違いがあった。それは、物語における日記叡覧が、後々、仲忠や光源氏に繁栄をもたらしたのに対して、道真の場合は、天皇の賞讃はほんの束の間、程なく昌泰の変によって道真は左遷の憂き目を見ることになってしまったという点である。『菅家三代集』の叡覧は、左遷に際して道真に何の力にもならなかった。歴史は非情と言うべきか。書物も文事も現実に対しては、結局無力な存在でしかなかったのである。

だが、物語においては、そうでなかった。物語の中でだけは、書物が、文学が現実に力を発揮し、実際に現実

を動かすという理想が、まさに実現を見たのである。

四

帝の御前の絵合の最後に出陳され、二度に渡る絵合の勝負を最終的に制することになる、光源氏の日記とは、実際いかなるものであったろうか。

その世に、心苦し、悲しと思ほしゝほどよりも、おはしけむあり様、御心に思しゝ事ども、たゞ今のやうに見え、所の様、おぼつかなき浦々、磯の隠れなく描きあらはし給へり。草の手に、仮名の所々に書き交ぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる、類ゆかし。

それは、「まほのくはしき日記にはあらず」、当時の男性貴族、官人の日記の通例であった漢文日記ではなく、「あはれなる歌なども交れる」、「草の手に、仮名の所々に書き交ぜ」た、仮名の日記であった。それはあたかも、

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

を冒頭に標榜して書き始められた仮名の日記、紀貫之『土左日記』に類同する。「男も書く日記を、女の私もやってみようという紀貫之の女に仮託した意味は何のためか。これは、貫之が官人貫之の立場から解放されて自由に思うがままに書きたかったからである」（山中裕「日記と記録」、『鑑賞日本古典文学　王朝日記』所収）。そしてそれが仮名であったのは、母語である大和言葉を写し得る仮名を用いてこそ、「記録においては、あまり書かない、書きたくとも表面には明確に出すことのできない個人の内面の心が表現され」得たからであろう。

光源氏の須磨の日記が仮名で書かれたのも、同じ理由によるであろう。貫之とは別な意味で、彼も、「官人」光源氏の「立場から解放されて」いたのだ。そして、それゆえに彼もまた「自由に思うがままに書きたかった」のである。だからこそ、「あはれなる歌なども交れる」その日記は、「おはしけむあり様、御心に思しゝ事ども、たゞ今のやうに見え」、人々に感動を喚んだものに違いない。

こうした形式による日記として、『土左日記』は、光源氏の須磨の日記の形式上の前例であったと言うことができるであろう。

源氏の日記は、「かの旅の御日記」（絵合）とも言われている。いずれも内容は、羈旅の日記。しかも、『土左日記』もまた、この時代、絵に仕立てられていたことが『恵慶集』によって知られている。

貫之が土左の日記描きたる、五年を過しけるに家の荒れたる所

くらべこし波路もかくはあらざりき蓬生原となれる宿かな　（書陵部本）

光源氏の「須磨の日記」に対して、『土左日記』は「貫之が土左の日記」と呼ばれていたことが注意されるが、もし仮にこれが絵巻であったとすれば、その絵巻は、光源氏の須磨の日記を髣髴とさせるものであったであろう。ただ、この『土左日記』の絵が、絵巻であったか、何であったか、その形態を明らかにすることはにわかには難しい。

その点においても、光源氏の須磨の日記を考える上で参考になると思われるのは、やはり「在五中将の日記」、『伊勢物語』であろう。

『伊勢物語』が絵に描かれていたことは、『源氏物語』にも「在五が物語を描きて、妹に琴教へたる所の、人の

結ばむと言ひたるを見て」（総角）とあるところから夙に知られるところだが、それが絵巻であった場合のあったことは何より絵合の記事が明らかにしている。

『伊勢物語』を「在五中将の日記」とするならば、それは『源氏物語』に記された、光源氏の須磨の日記とほぼ同じ形式であったことが改めて注目されるであろう。「在五中将の日記」、『伊勢物語』もやはり、「まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる」、「仮名」の日記絵巻。それを、「在五中将の日記」と見る限り、この『伊勢物語』の絵巻は、光源氏の須磨の日記と、内容、形式ともにきわめて近いものであったことになる。

絵合の席上、平内侍は『伊勢物語』に心を寄せて、

伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

と詠み、藤壺も、

みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海人の名をや沈めむ

と詠んだが、ともに詠ずるところは伊勢の海辺の情景。とすれば、この絵巻の図様は、そうした情景を描くものがあったと考えられるであろう。『伊勢物語』六九段、伊勢斎宮との一件を描いたものでもあろうか。あるいは、歌句の類似を考えるならば、七〇段、

みるめ刈るかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

七二段、

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな

七五段、

袖ぬれて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

あたりを考えるべきか。いずれも、「品高き女性との禁制の恋」を描いた段であり、それは源氏との「禁制の恋」の当事者藤壺にとっては、重大な意味を痛感させるはずの段であった。

それはいずれにしても、これら海辺の情景は、ただちに光源氏須磨の日記、「所の様、おぼつかなき浦々、磯の、隠れなく描きあらはし給へり」を連想させよう。『伊勢物語』の絵巻は、その図様の点においても、光源氏の須磨の日記を具体的に想像させるものであったと言うことができる。

しかしそれにしても、帝の御前での絵合で斎宮の女御方を勝利に導くほどの感動を人々にもたらした、光源氏の須磨の日記とは、光源氏その人の苦難の日記として、どのようなものであったか、なお興味は尽きない。そこには、何が書かれていたのか。どのように、素晴らしいものであったのか。

残念ながら絵合の巻には、それ以上の説明は無い。しかし、それがどのようなものであったか、想像を巡らす手懸りが無いわけでは無い。

絵合の巻は、光源氏須磨の日記を、

かの須磨、明石の二巻は、思すことありて取り交ぜさせ給へりけり。

左は、なほ数一つある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。

と記していた。

光源氏須磨の日記は、「須磨の巻」、「かの須磨、明石の二巻」と呼ばれていたのである。「須磨の巻」、「須磨、

明石の二巻」と言えば、『源氏物語』の読者であれば、『源氏物語』の巻としての「須磨の巻」、「明石の巻」を同時に想い浮かべるであろう。[22]「かの須磨、明石の二巻」とは、光源氏の日記を指すだけではなく、『源氏物語』の巻としての、須磨、明石の二巻をも、想起させるものではなかったか。

とすれば、光源氏の須磨の日記、「かの須磨、明石の二巻」とは、『源氏物語』の須磨の巻、明石の巻でもあったことになる。たしかに、この両巻には、光源氏の須磨退隠の日々が克明に描かれていた。まさにそれは、「まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる」ものであり、同時にまた「おはしけむあり様、御心に思しゝ事ども、たゞ今のやうに見え」るものでもあって、絵合の記述を少しも裏切るものではなかった。裏切るどころか、この須磨、明石の二巻こそは、源氏の真情を縷説して、光源氏須磨の日記というものへの期待に十分に答え得るものでもあったのである。

光源氏の日記、「須磨、明石の二巻」は、ここに、『源氏物語』須磨、明石の二巻に重ね合わされることとなる。『源氏物語』とはこの場合、主人公光源氏の日記にも相等するものであったと理解すべきであろう。[23]

しかし、『源氏物語』それ自体が絵巻に仕立てられたという確証は、『隆能源氏絵』を含めて、十二世紀を溯るものではない（寺本直彦『源氏物語受容史論考』、秋山光和『平安時代世俗画の研究』等）。けれども、「文は女房に読まして正身は絵を見ているというのが昔物語の普通なまた正しい楽しみ方であった」と考えられている（玉上琢彌「昔物語の構成」、『源氏物語研究』所収）ことからすれば、『源氏物語』の時代にも『源氏物語』が絵に描かれ、あるいは絵巻に仕立てられたこともあったかも知れない。いずれにしても、『源氏物語』須磨の巻、明石の巻の、具体的、絵画的な描写は、それが光源氏須磨の日記の絵巻を想像するに十分なものではなかったろうか。

所の様、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。（須磨）

所の様をばさらにも言はず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などのありさま、えも言はぬ入江の水など、絵に描かば、心の至り少なからむ絵師は、描き及ぶまじと見ゆ。（明石）

『源氏物語』須磨、明石の巻の記述は、そのまま光源氏須磨の日記、「かの須磨、明石の二巻」を具体的に説明するものとなってもいる。

絵合に出陳された、光源氏の須磨の日記を考えるとき、それは具体的には、『源氏物語』須磨の巻、明石の巻の如きを念頭に置くべきであろう。光源氏須磨退隠の日々を描く『源氏物語』須磨の巻、明石の巻は、光源氏須磨の日記に描かれたであろう内容を伝える、唯一のその代替物であったのである。

ということは、逆に、『源氏物語』の須磨の巻、明石の巻とは、光源氏自身の、日記にも相等するものであったことになる。すなわち『源氏物語』とはまた、主人公光源氏の日記として見做し得るものであったということである。

ここに、他ならぬ『伊勢物語』が「在五が物語」でもあり、同時に主人公と目される在原業平自身の日記、「在五中将の日記」でもあったことが思い合わされるであろう。「平中物語」に対する「平中日記」、「篁物語」に対する「篁集」、「篁日記」、「多武峰少将物語」に対する「高光日記」、「和泉式部日記」に対する「和泉式部物語」等の異称の存在は、物語と、家集、日記の区別が必ずしも厳密なものでなかったことを物語る。『うつほ物語』にも、「たゞありつる事を、物語のやうに書き記しつゝ、その折の歌どもを付けたり」とあった。日記とは

しばしば、その筆者についての物語であり、物語とはしばしば、その主人公の自らものした日記と考えられたのである。

ならば、絵合における光源氏須磨の日記の勝利とは、他ならぬ『源氏物語』自体の勝利であったということになる。並居る絵巻、「長恨歌、王昭君などやうなる絵」から始まって、選りすぐられた「物語絵」、「月次の絵」、「四季の絵」の競演の末に登場し、最終的に叡覧の絵合を制覇した光源氏の須磨の日記の勝利とは、取りも直さず、『源氏物語』の勝利であったことになるのではないか。

「次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず」。藤壺御前の絵合の二番勝負は、侃々諤々、雌雄にわかに決し難かったと言う。両度に及ぶ絵合が、ともにいわば団栗の背競べの観を呈した中で、仕切直しの絵合もその大詰め、結びの一番において、圧倒的な強さを見せつけた源氏の日記の勝利とは、絵合出陳の他の物語に対しての、『源氏物語』の圧倒的優越を、示すものであろう。それは、「竹取」、「伊勢」、「うつほ」、「正三位」その他、凡百の物語、絵巻に対する『源氏物語』の勝利に他ならなかった。あたかもそれは、物語の文学史上最後に登場し、今やそのすべてを凌駕しようとしている、『源氏物語』の文学史制覇を誇らかに告げようとするものではなかったか。

あるいはそれも、「紫式部のひそかな夢」を体現するものであった、と見るべきかも知れない。

五

絵合の勝敗を巡っては、双方激しい議論が闘わされた。

この人々のとりぐに論ずるを聞し召して、左右と方分かたせ給ふ。梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦、右には大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦を、たゞ今は心憎き有職どもにて、心々に争ふ口つきどもを、をかしと聞し召して、

その文章は、内容を反映して、叙事を事とする物語の中にあっては珍しく、議論文の色彩を色濃くしている。さて、「論ずる」「有職」などといういかめしい堂々たる言葉のもつ意味と、次にあらわれる竹取、洞など童蒙のもてあそびものとのあまりの落差を埋めるのが、「物語のいできはじめのおやなる」という肩ひじ張った言い廻しである。そこから、以下の文章は対句あり縁語懸詞あり、女房の「論ずる」会話の言葉ともとれるが、またいつしかその場の叙述ともとれる文章になってゆく。だが、いかめしくわざとらしい調子は一貫していて、女房の口つきも四六文のようにしゃちこばっているなら、その場の空気も芝居がかっているのだと、伝えることに成功している。

（清水　前掲論文）

「対句あり縁語懸詞あり」、「四六文のようにしゃちこばっている」文章と言えば、ただちにそれは、「中国流の四六駢儷体に範をとろうとした」、「論の組立ては漢文に依存し、修辞は漢文流対句と和歌の言葉による」、『古今和歌集』仮名序の文章（渡辺実『平安朝文章史』）を連想させるものである。

続く一節。

まづ、物語の出で来始めの親なる竹取の翁に、うつほの俊蔭を合はせて争ふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしき節もなけれど、かくや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひ登れる契り高く、神代の

ことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。

「「出で来はじめの」はだれもが気づくように『古今和歌集』仮名序の「このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり」をふまえた表現であろう」（藤井貞和「物語の出で来はじめの親」、鈴木日出男編『別冊国文学　竹取物語伊勢物語必携』所収）。恐らく、この前後は、『古今集』仮名序の文章に倣って綴られている。

「いでく」は、出て来る、作り出される、などの意味を持つと辞書の説明にある通りだが、本来的には自然発生を言う語であったろう。和歌が神代に出現したのと同じように物語も出現したというのだ。物語がこの世に最初に出現した、その起源の書物が『竹取物語』だ、というのがこの言い回しの端的な意味であった。但し「竹取の翁物語」と「物語」を付して言わないのは「（養い）親なる竹取の翁」という人名が引っかけられているからだ、ということが分かる。「親（おや）」は起源のものという意味合いなので、「うた」には「ちゝはゝ」があるのと同じ理屈であった。

（藤井　前掲論文）

『古今集』仮名序は、

この歌、天地の開け始まりける時より出で来にけり。

と和歌の起源を説き、

この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始めにもしける。

と、その歴史を振り返った。すなわち、難波津の歌と、安積山の歌。『古今集』仮名序は、こうして和歌という文学の本質を論じた。

一方、『源氏物語』の絵合巻にも、『古今集』仮名序を意識した表現が見られる。ということは、絵合の巻自体

にも、『古今集』仮名序の和歌の論に倣って物語の論を展開しようとするところがあったのではないか。

この言い回しのすぐあと、「かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りかたく、神世のことなめれば……」とあるのだから、蛍の巻の「（物語は）神代より世にあることを記しおきけるなり」をこれに併置してみると、当時の独得な神代起源の考え方に基づくものであることが分かる。

（藤井　前掲論文）

『源氏物語』の物語論と言えば、蛍の巻のそれが夙に世に知られている。しかし、絵合の巻のこの前後も、『源氏物語』の物語論として理解してもよいのではなかろうか。

その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも悪しきも、世に経る人のあり様の、見るにも飽かず、聞くにも余る事を、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠め難くて、言ひ置き初めたるなり。

蛍の巻の物語論は、このように物語というものを規定したが、それは『古今集』仮名序に言う、

やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの、聞くものにつけて言ひ出せるなり。

という、和歌の本質規定に呼応したものに他ならない。『源氏物語』は、『古今集』仮名序の和歌の論に対抗して、自ら物語を論じたのである。以下、蛍の巻では、仮名序和歌の論に対して、物語の論が展開される（村井順『源氏物語評論』）。

しかし、『古今集』仮名序が、その本質論に続いて論じた、和歌の起源や歴史、和歌六義や六歌仙評など実例

の提示等に当る箇所は、蛍の巻の物語論には欠けている。『古今集』仮名序に倣い、かつそれに対抗するものとして物語論を展開しようとすれば、蛍の巻の物語論にはなお十全でない面があるのである。例えば、和歌というものへの歴史認識、あるいは実作への自覚的反省。

それを、場所を変えて行ったのが、絵合の巻なのではなかったろうか。「物語の出で来始めの親」、「神代のこと」等の表現には、すでに物語の起源とその後の歴史への自覚があったことが窺われよう。『古今集』仮名序にも、「ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず」という認識が見えている。

仮名序では、以下、「人の世となりて」以後の和歌の歴史を実例を挙げつつ振り返るが、『源氏物語』の絵合にも、同様の歴史認識が認められる。

藤壺の御前での絵合、それに出陳された四つの物語の間には、自ら序列がつけられていた。

梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑある限り、弘徽殿は、その頃世にめづらしく、をかしき限りを選り描かせ給へれば、うち見る目の今めかしき華かさは、いとこよなく勝れり。

「物語の出で来始めの親なる竹取の翁」を出陳した、左方斎宮の女御方の持駒は古作の物語、対する右方弘徽殿方のそれは、新作の物語であった。

双方は、新古、古今の対抗意識に燃えたのであった。そこに選ばれた作品は、「いにしへの物語」として、「竹取の翁」、「伊勢物語」、「その頃」の作品として、「うつほの俊蔭」、「正三位」。すでにそこには、物語成立の時期と、その作風に対する冷静な認識が見て取れる。中でも、その起源とも言うべき最古の作品が、「竹取の翁」であった。とすれば、その次に古い作品は、「伊勢物語」。続いて「うつほ」、「正三位」。四つの物語は、物語の歴

史に従って明確に定位されていたのである。果たしてその順序は、現代の文学史研究の成果と矛盾するものではない。

勿論、『源氏物語』以前、物語として多くの作品が作られていた。しかし、『源氏物語』絵合に採るに足ると認められた物語は四つ。それは一種の撰集でもあった。その選択が誤りでなかったことは、凡百の物語が歴史の彼方に散逸してしまったなかで、「正三位」一つを除いてこれらが物語の代表作として今に伝存していることを以って証されていると言うことができよう。しかも、その年代的定位も、ほぼ正確であった。これら四つの物語の選択と配列において、ここには物語というものの刻んだ文学史に対する冷徹な認識が働いていたことが窺える。それは、『古今集』仮名序の語る、和歌の起源と歴史に、まさしく対応するものではなかったか。

さらに、この四作品には、的確な寸評が加えられていたが、これらは例えば、『古今集』仮名序の、六歌仙評に匹敵すると考えられるのではなかろうか。

いずれにしても、『源氏物語』の絵合の実例の呈示には、蛍の巻の抽象論と相俟って、『古今集』仮名序の和歌の論に対抗し得る、物語への自覚的認識が展開されていると見ることができるのである。[24] これは、『源氏物語』自身による、物語というものの総括、その文学史の総決算なのではなかったろうか。歌合に対して、結合すなわち物語合、和歌の論に対して物語論、またしても物語は、和歌の位地を意識して自らの存在を主張した。

『古今集』では、その後、それらの歴史認識を踏まえて、『古今和歌集』勅撰の意義が高らかに謳われることになる。

遍ねき御慈みの波、八洲の外まで流れ、広き御恵みの陰、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、万の政を聞

し召す暇、諸の事を捨て給はぬ余りに、古の事をも忘れじ、古りにし事をも興し給ふとて、今も見そなはし、後の世にも伝はれとて、

和歌の本質と伝統を再認識し、ここにその道を集成中興しようとする『古今和歌集』の勅撰。それは、盛代、聖帝の仁慈に出ずることであった。

事はそのまま、『源氏物語』絵合にも通ずるのではないか。

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私ざまのかゝるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御世なり。

それはまさしく、新帝冷泉帝の盛代を寿ぐ、一大慶事であったのである。

とすれば、絵合という行事は、物語の歴史を集成、総括し、物語という文学自体を確立することを期すという、和歌の歴史における『古今集』の勅撰にも比すべき偉業であったということになる。両度に渡る絵合の行事が、一度は中宮の御前で、再度は帝の御前で行われたということの意味も、こうした文学史への自覚の点から改めて理解すべき事柄である。

そして、その他ならぬ二度目の絵合、帝の御前での絵合において、最終的に光源氏の須磨の日記が勝利を勝ち得たことの意味も、また再認識を迫られよう。すなわち、藤壺の御前での絵合、すなわち物語合は、「物語が晴れの場にとりあげられ」たとは言え、「かやうの女ごとにて、乱りがはしく争ふに」とあるように、なお未だ、後宮、女の世界での認知に留まるものであった。その中で、ひとり源氏の日記、「須磨の巻」だけが帝の御前での絵合において叡覧に供せられるという光栄に浴したのは、『源氏物語』だけは、然るべき男子の然るべき鑑賞

にも堪え得るということを、暗に主張するであろう。けだし、天覧に値する物語は、源氏の日記、すなわち『源氏物語』を措いて他に無かったのである。

古今の代表的な物語の揃い踏みを前にしながら、帝の御前での絵合において、究極的に『源氏物語』が、勝利を与えたのが源氏の日記であったことは、他ならぬ『源氏物語』こそが、数々の物語を凌駕し、その文学史を制するものである、ということをいよいよ主張するであろう。それは、本朝和歌史における、『古今和歌集』の撰進にも匹敵するものである。絵合における、源氏日記の制覇とは、物語文学史における『源氏物語』の制覇を、結局は示すものであったと言うべきであろう。

『源氏物語』には、その自恃と自覚とが十分にあった。『源氏物語』は源氏の日記を次のように記していた。

草の手に、仮名の所々に書き交ぜて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌なども交れる、類ゆかし。

「まほのくはしき日記」への否定[25]は、そのまま蛍の巻の物語論、

神代より、世にある事を記し置きけるなゝり。日本紀などは、たゞかたそばぞかし。

の自恃に通うであろう。漢文の日記や史書をも凌ぐものとして、『源氏物語』は自らの位地を主張したのである。帝の御前の絵合での須磨の日記の披露の直後、光源氏は、学問それ自体は必ずしも幸福に結びつくものではないことを明言している。

いはけなき程より、学問に心を入れて侍りしに、少しも才など付きぬべくや御覧じけむ、院の宣はせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、

いと難きものになむ。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじき程にて、あながちにこの道な深く習ひそと、諫めさせ給ひて、本才のかたぐのもの教へさせ給ひしに

「学問」、「才学」よりも、むしろ「本才」の重要性が主張された。その「本才」の発露が、須磨の日記であったのである。その点において、光源氏の仮名の日記は、白楽天や道真の漢詩文とは一線を画して異なっていたと言わなくてはならない。

「学問」、「才学」ならぬ「本才」の発揮され得る場が、物語なのであった。それこそが、可能性として物語に拓かれた地平であったのである。『源氏物語』は、「あはれなる歌なども交れる」、仮名の日記ならぬ物語の可能性を、十分に自覚していた。そして、物語の歴史において、その可能性を最大限に開花させ得る作品が、『源氏物語』であったことにも十分に自信を抱いていた。その可能性が十分に発揮されるならば、物語は現実をも動かし得る大きな力となるかも知れない。『源氏物語』の絵合とは、その、文学史への布置を狙った、きわめて意欲的な構想によるものであったのである。

「一つ家の内は照らしけめど、百敷の畏き御光には並ばずなりにけり」。藤壺御前の絵合での、『竹取物語』批難。かぐや姫が、帝の求婚を拒絶し入内しなかったことを難じている。「雲の上に思ひのぼれる心には千尋の底もはるかにぞ見る」。同じく、『正三位物語』援護。「雲の上に思ひのぼれる心には」とは、恐らくヒロイン「兵衛の大君」が気位高く入内を志したことを評価しての物言いであろう。いずれも、天皇の権威への親疎が、その評価の基準になっていた。作品の出来よりも、内容が皇威に近いか否かが、判定の尺度にされたのである。「雲

の上に思ひのぼれる心」から見れば、対する『伊勢物語』、皇孫在原業平の物語も、所詮「千尋の底」と蔑まれるべきものでしかなかった。なるほど『伊勢物語』、さしもの業平の恋物語も後半は、政治的敗残者の物語に堕してしまっている。

『源氏物語』はどうか。いずれも「品高き女性への禁制の恋」を描き、ともに東下り、須磨退隠の流離を描きながら、しかしその後の主人公のたどった人生の軌跡は『伊勢物語』とはまったく対照的であった。須磨から都へ帰還してからの光源氏の人生は順風満帆、絵合の勝負にも無事勝利して、源氏は天皇の実父としてやがて准太上天皇という尊貴にまで至るのである。「在五中将の名をば、え朽さじ」とは言うものの、その差には、歴然たるものがあったのである。この点においては、『竹取物語』には勝利し得た『うつほ物語』も、『源氏物語』の敵ではなかった。俊蔭一統、琴の奇瑞で出世を果すとは言っても、いずれ人臣の枠を越えるものではない。ただ『源氏物語』だけが、そのいずれをも凌ぐ、希有の栄達を描く物語として、すべてに優ったのである。

『紫式部日記』は、『源氏物語』が時の帝、一条天皇の天聴に達したことを誇らしげに記している。

うちの上の、源氏の物語、人に読ませ給ひつゝ聞し召しけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と宣せけるを、ふと推し量りに、「いみじうなむ才がる」と、殿上人などに言ひちらして、日本紀の御局とぞ付けたりける。いとをかしくぞ侍る。このふるさとの女の前にてだに、つゝみて侍るものを、さる所にて、才賢し出で侍らむよ。

作品が天皇に認められることが、どれほどの栄光か、以って知ることができよう。

「日本紀などは、たゞかたそばぞかし。これらにこそ道々しくくはしき事はあらめ」。そうした栄光を、作中に

おいてすでに実現するものが、『源氏物語』の絵合であったのである。

注

(1) こうしたことを作中に描くことは、相撲の節会（初秋）、涼、仲忠の技芸競べ（吹上下）等を描く、『うつほ物語』に倣うところが大きかったであろう。

(2) 『源氏物語』の時代、書物が「宝物」であったことについては、前稿「藤のうら葉のうらとけて――梅枝・藤末葉巻――」、『源氏物語講座　第三巻　光る君の物語』所収）に述べた。

(3) 『権記』にも、「天暦八年御記」、「天暦八年冬巻」、「村上御記天徳四年夏巻」（寛弘七年五月）の記事が見える。

(4) 『撰集抄』も、道真の左遷を見過した醍醐天皇を、「この延喜の帝は「仁流二秋津洲之外一」、恵茂二筑波山之陰一」」なんどと言はれ給ひしに、咎のいませざりし北野を、遥かの境まで流し遣し給へる事こそ、いかなりける御誤りやらんと覚え侍り」（「北野天神左遷路詩事」）、白楽天の左遷を見過した唐の帝を、「げにも濁らぬ君にてましまさば、さこそ寵愛も侍るべきに、剰つさへ左遷行はれ侍る事、唐国も無下に心劣りてこそ覚え侍れ」（「楽天左遷詩事」）と咎めている。

(5) 「光源氏をも安和の左相に比すと言へども、好色の方は、道の先達なるがゆへに、在中将の風をまねびて、五条二条の后を薄雲女院朧月夜の尚侍によそへ」（『河海抄』）。

(6) 「絵合」自体は、永承五（一〇五〇）年正子内親王家歌合において実現されるが、これは歌絵合であった。また、祺子内親王家の「物語合」も、歌合としては物語の歌、あるいは物語にちなむ歌の歌合であった。

(7) 小野篁には、他に「謫行吟」、『野相公集』などの文業もあった（『日本文徳天皇実録』、『本朝書籍目録』）。

(8) 菅原道真と『源氏物語』については、今井源衛「菅公と源氏物語」、「菅公の故事と源氏物語古註」（『紫林照径　源氏物語の新研究』）に詳しい。

(9) 同じく須磨、「去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御あり様などいと恋しく、南殿の桜は盛りになりぬらむ、一年の花の宴に、院の御けしき、内の上のいと清らかになまめいて、我が作れる句を誦じ絵ひしも、思ひ出で聞え給ふ」も、『菅家後集』「九月十日」の故事を踏まえるであろう。また、須磨での源氏の詠歌、「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふか

たより風や吹くらむ」は、大宰府へ向う道真の詠歌、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主無しとて春な忘れそ」（『大鏡』等）と、発想を等しくしている。

(10) ただし、特に絵合に提出された日記の絵巻については、「本質的には真の理解者である藤壺に献上するのを目的として作成された」、また「梅壺女御に託するとともに、冷泉院にも見る機会を与えるためであった」（伊井春樹「須磨の絵日記から絵合の絵日記へ」、『中古文学』第三九号）と考えられるであろう。また光源氏の須磨の日記の絵巻は、執筆時の冊子本を、後に巻子に仕立て直したものであったらしい。

(11) 「昌泰三年八月より西府にして作らせ給ひたる詩篇を集めて後集と名付けて、延喜三年正月之比、漸く神心例に違ひ給ひしに、箱中に納めて、中納言長谷雄卿の元へ遣はしき。紀納言是を披見して、天に仰ぎ地に伏して嘆き給ひき。藻思の妙たへて天下に双び無し。卿相位にいますと言へども花月を投げうて給はず。凡そその文人の口にあり。後代文章の人を言はんに、菅家を称せずといふ事なし云々　西円」（『異本紫明抄』）。

(12) 白楽天と元稹の交情は、『源氏物語』須磨の巻では、わざわざ須磨を訪れた頭中将（後の権大納言）と源氏の交友に受け継がれている。

(13) 『白氏文集』を絵画化した『文集屏風』（『栄花物語』等）などに、すでに白楽天の草堂生活を描いたものがあったか。ちなみに大串純夫氏は、『東寺山水屏風』が「白氏草堂訪客図」であり、その図様が『源氏物語』に影響を与えた、と言う（「人麿像の成立と東寺山水屏風」、『美術研究』第一六五号）。

(14) 「野相公在納言菅家西宮左府帥内大臣以下、抜群賢才、無レ罪赴二配所之月一人、不レ可二勝計一」（河海抄）。

(15) こうした居所の記の伝統については、「和漢混淆の記――方丈記考――」（『成城国文学論集』第一九輯）に論じた。

(16) 「かく思ひかけぬ罪に当り侍るも、思う給へ合はする事の一節になむ、空も恐しう侍る」、「宮も、皆思し知らるゝ事にしあれば、御心のみ動きて聞えやり給はず」（須磨）。

(17) 須磨の巻には、「ふるさとをいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね」の詠もある。

(18) 『うつほ物語』の引用は、便宜『日本古典文学大系』『角川文庫』等に拠った。

(19) 『うつほ物語』「俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より」の「父の朝臣の日記」の「序」には、「唐の間の記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは異人見るべからず」とあったと言う（蔵開上）。俊蔭の父は、息子在唐の間の日記を、俊蔭本人のためだけに

綴っていたと言うのであろう。とすれば、それは須磨の光源氏が、紫の上の「返り事聞くべき様にしなし」て、その日記を描いていたということ、そしてまたこの日記が最終的に藤壺に奉られたことと、符合することになるであろう。また、『うつほ物語』「俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りける間より始めて、京に娘の上を言ひ初めて、言ひつゝ折々に歌あり」という草子等も、「これは内侍の督の見るべき事どもにこそあめれ」とされている（蔵開中）。

(20) 後、嵯峨、朱雀両院の京極邸御幸の際、「唐土の集の中に小冊子に所々絵描き給ひて歌詠みて三巻ありしを、一巻を朱雀院に奉らむ」と、その一部は朱雀院に献上されることが語られる（楼上下）。

(21) 清水好子『源氏物語論』は、「周公旦を光源氏須磨退隠の先例と考え」、「作者の教養と源氏物語第一部を貫く理想主義的傾向から、あきらかに作者は周公を念頭において、理想の人物光源氏を中国古代の聖人に比肩させつゝ書いたと考える」と言う。

(22) 「源氏の五十余巻」（『更級日記』定家本）、「須磨、あはれにいみじき巻なり」（『無名草子』）など、『源氏物語』の各帖は、古くから「巻」と呼ばれていた。

(23) 絵合の巻には「「かの浦々の巻は、中宮に候はせ給へ」と聞えさせ給ひければ、これが初め、また残りの巻々ゆかしがらせ給へど、「今、次々に」と聞こえさせ給ふ」とあって、源氏の須磨の日記にはその前後に姉妹篇とも言うべき一連の日記があったことがほのめかされている。光源氏の日記は、さらに『源氏物語』の多くの部分と重なるものであったのである。また、この記事は、『うつほ物語』俊蔭巻末「次々にぞ」、国譲上巻末「残りは次々にぞあるべしとぞ」等を想起させる。

(24) 雨夜の品定めの女性論にも、『古今集』仮名序に倣うところがあるが、これも前半は一般論、後半は具体例の列挙という構成になっている。

(25) 梅枝の巻には、「よろづの事、昔には劣り様に浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる」以下、仮名の論が展開される。なお、拙稿「はかもなき鳥の跡とは思ふとも――源氏物語を書くこと――」（『源氏物語序説』所収）参照。